

化鳥

泉鏡花

青空文庫

第一

おもしろ 愉快いな、愉快いな、お天気が悪くつて外へ出て遊ばなくつ
 ても可や、笠を着て蓑を着て、雨の降るなかをびしよ／＼濡れ
 ながら、橋の上を渡つて行くのは猪だ。
 すげがき まぶか かぶ しぶき ぬ
 菅笠を目深に冠つて※に濡れまいと思つて 向風に俯向いて
 るから顔も見えない、着て居る蓑の裾が引摺つて長いから脚も見
 えな いで歩行いて行く、背の高さは五尺ばかりあらうかな、猪
 ぬし、
 子しては大なものよ、大方猪ん中の王様が彼様三角形の
 冠を被て、市へ出て来て、而して、私の母様の橋の上を通る

のであらう。

トかう思つて見て居ると愉快い、愉快い、愉快い、愉快い。

寒い日の朝、雨の降つてる時、私の小さな時分、何日でしたつけ、窓から顔を出して見て居ました。

「母様、愉快いものが歩行いて行くよ。」

爾時母様は私の手袋を拵えて居て下すつて、

「さうかい、何が通りました。」

「あのウ猪。」

「さう。」といつて笑つて居らしやる。

「ありや猪だねえ、猪の王様だねえ。」

母様。だつて、大いんだもの、そして三角形の冠を被て居

ました。さうだけれども、王様だけれども、雨が降るからねえ、

びしよぬれになつて、可哀想だつたよ。」

おつかさん
母様は顔をあげて、此方をお向きで、

「吹込みますから、お前も此方へおいで、そんなにして居ると衣服が濡れますよ。」

「戸を閉めやう、母様、ね、こゝん処の。」

「いゝえ、さうしてあけて置かないと、お客様が通つても橋錢を置いて行つてくれませんか。づるいからね、引籠つて誰も見て居ないと、そゝくさ通抜けてしまひますもの。」

わたし
私は其時分は何にも知らないで居たけれども、母様と二人ぐらしは、この橋錢で立つて行つたので、一人前幾于宛取

つて渡わたしました。

橋はしのあつたのは、市まちを少し離はなれた処ところで、堤防どてに松まつの木きが並ならむで植うはつて居ゐて、橋はしの袂もとに榎えの樹きが一本いっほん、時雨しぐれ榎えのきであ

つた。

此この榎のきした箱はこのやうな、小ちひさな、番小屋ばんごやを建たて、其そこ処ところに母おつかさ

様んと二人ふたりで住すんで居ゐたので、橋はしは粗造そざうな、宛然まるで、間まに合あはせと

いつたやうな拵こしらえ方かた、杭くいの上うへへ板いたを渡わたして竹たけを欄干らんかんにしたばか

りのもので、それでも五人ごにんや十人じゅうにんぐらゐ一いっ時ときに渡わたつたからツて、

少すこし揺ゆれはしやうけれど、折をれて落おつるやうな憂慮きづかひはないので

あつた。

ちやうど市まちの場末ばすゑに住すむでる日傭取ひようとり、土方どかた、人足にんそく、それから、

三味線を弾いたり、太鼓を鳴らして飴を売つたりする者、越後獅子やら、猿廻やら、附木を売る者だの、唄を謡ふものだの、元結よりだの、早附木の箱を内職にするものなんぞが、めぬきまちで往帰りには、是非母様の橋を通らなければならぬので、百人と二百人づゝ朝晩賑な人通りがある。それからまた向ふから渡つて来てこの橋を越して場末の穢い町を通り過ぎると、野原へ出る。そこん処は梅林で上の山が桜の名所で、其下に桃谷といふのがあつて、谷間の小流には、菖浦、燕子花が一杯咲く。頬白、山雀、雲雀などが、ばらくくになつて唄つて居るから、綺麗な着物を着た問屋の女だの、金満家の隠居だの、瓢を腰へ提げたり、花の枝をかついだりし

ちどりあしとほ
て千鳥足で通るのがあある、それは春のことで。夏になると納涼
だといつて人が出る、秋は茸狩に出懸けて来る、遊山をするの
が、皆内の橋を通らねばならない。

あひだたれ
この間も誰かと二三人づれで、学校の教師匠さんが、内の前
を通つて、私の顔を見たから、丁寧に辞義をすると、おや、
といつたきりで、橋銭を置かないで行つてしまつた。

おつかさん
「ねえ、母様、先生もづるい人なんかねえ。」
まどかほひつこ
と窓から顔を引込ませた。

第二

「お心易こころやすだて立たたんでしやう、でもづるいんだよ。余程よつほどさうい
 はうかと思おもつたけれど、先生せんせいだといふから、また、そんなこと
 で悪わるく取とつて、お前まへが憎にくまれでもしちやなるまいと思おもつて黙だまつて
 居ゐました。」

といひく、母おつかさん様さんは縫ぬつて居ゐらつしやる。

お膝ひざの前まへに落おちて居ゐた、一ひとツの方ほうの手て袋ぶくろの格かく恰かうが出来できたのを、
 私わたしは手てに取とつて、掌てのひらにあて、見みたり、甲かぶの上うへへ乗のつて見みたり、
 「母おつかさん様さん、先せんせい生せいはね、それでなくつても僕ぼくのことを可か愛あいがつ
 ちやあくだ下くださらないの。」

と訴うへるやうにいひました。

かういつた時ときに、学がく校かうで何なんだか知しらないけれど、私わたしがものをい

つても、快く返事をおしでなかつたり、拗ねたやうな、けんどんなやうな、おもしろくない言ことばをおかけであるのを、いつでも情なさけいと思おもひくくして居ゐたのを考かんがへ出して、少すこし鬱ふさいで来きて俯うつむ向むいた。

「何故なぜさ。」

何なに、さういふ様子やうすの見えるのは、つひ四五日しごにちまへ前から、其前そのさきには些ちつと少すこもこんなことはありはしなかつた。帰かへつて母おつかさん様にさういつて、何故なぜだか聞きいて見みやうと思おもつたんだ。

けれど、番小屋ばんごやへ入はいると直飛すぐとびだ出して遊あそんであるいて、帰かへると、御ご飯はんを食たべて、そしちやあ横よこになつて、母おつかさん様の気けだか高い美うつくしい、頼母たのもしい、温おんたう当たうな、そして少すこし瘦やせておいでの、髪かみを束たばねてしつとりして居ゐらつしやる顔かほを見みて、何なにか談話はなしをしいく、ぱつち

りと眼をあいてるつもりなのが、いつか其まんまで寝てしまつて、眼がさめると、また直支度を済まして、学校へ行くんだもの。

そんなこといつてる隙がなかつたのが、雨で閉籠つて淋しいので思ひ出した序だから聞いたので、

「何故だつて、何なの、此間ねえ、先生が修身のお談話をしてね、人は何だから、世の中に一番えらいものだつて、さういつたの。母様違つてるわねえ。」

「むゝ。」

「ねツ違つてるワ、母様。」

と揉くちやにしたので、吃驚して、ぴつたり手をついて畳の上で、手袋をのした。横に皺が寄つたから、引張つて、

「だから僕ぼく、さういつたんだ、いゝえ、あの、先生せんせい、さうではないの。人も、猫ねこも、犬いぬも、それから熊くまも皆みんなおんなじ動物けだものだつて。」

「何なんとおつしやつたね。」

「馬鹿ばかなことをおつしやいつて。」

「さうでしやう。それから、」

「それから、だつて、犬いぬや猫ねこが、口くちを利ききますか、ものをいひ

ますか。ツて、さういふの。いひます。雀すずめだつてチツチツチツチ

ツて、母おつかさん様と父おとつさん様と、児こどもと朋ともだち達と皆みんなで、お談はなし話をして

るじやありませんか。僕ぼく眠ねむい時とき、うつとりしてゐる時ときなんぞは、

耳みみに來きて、チツチツチであつた時じぶん分ぶんからいひました。犬いぬも

猫ねこも人間にんげんもおんなじだつて。ねえ、母おつかさん様、だねえ、母おつかさん様、いまに皆みんな分わかるんだね。」

第三

母おつかさん様は莞爾にっこりなすつて、

「あゝ、それで何かなにかい、先生せんせいが腹はらをお立たちのかい。」
 そればかりではなかつた。私わたしが児こども心こころにも、アレ先生せんせいが嫌いやな顔かほをしたなト斯かう思おもつて取とつたのは、まだモ少すこし種いろん々なことはいひあつてからそれから後あとの事ことで。

はじめは先せんせい生せいも笑わらひながら、ま、あなたが左さう様おも思もつて居あるのな

ら、しばらくさうして置きましやう。けれども人間には智恵といふものがあつて、これには他の鳥だの、獣だのといふ動物が企て及ばない、といふことを、私が川岸に住まつて居るからつて、例をあげておさとしてあつた。

釣をする、網を打つ、鳥をさす、皆人の智恵で、何にも知らない、分らないから、つられて、刺されて、たべられてしまふのだトかういふことだつた。

そんなことは私聞かないで知つて居る、朝晩見て居るもの。

橋を挟んで、川を溯つたり、流れたりして、流網をかけて魚を取るの、川中に手拱かいて、ぶるくふるへて突立つて、さかすさかすさかす顔のある人間だけれど、そらといつて水に潜ると、逆

になつて、水みづくゞり潜ひそをしいく五分間ふんかんばかりも泳およいで居ゐる、足あしばかりが見みえる。其足そのあしの恰かくかう好わるの悪わるさといつたらない。うつくしい、金魚きんぎよの泳およいでる尾をひれ鱗すがたの姿すがたや、ぴらくくと水銀色すゐぎんいろを輝かゞやかしては刎はねてあがる鮎あゆなんぞの立派りつぱさには全然まるでくらべものになるのぢやあない。さうしてあんな、水浸みづびたしになつて、大川おほかはの中なかから足あしを出だしてゐる、そんな人間にんげんがありますものか。で、人間にんげんだと思おもふとをかしいけれど、川かは中なかから足あしが生はへたのだと、さう思おもつて見みて居ゐるとおもしらくツて、ちつとも嫌いやなことではないので、つまらない觀世物みせものを見みに行くゆくより、ずつとましなのだつて、母おつかさ様さんがさうお謂いひだから私わたしはさう思おもつて居ゐますもの。

それから、釣つりをしてますのは、ね、先生せんせい、とまた其時そのとき先生せんせい

にさういひました。

あれは人間ぢやあない、簞かしのこなんで、御覧ごらんなさい。片手かたゝとこ懐かたつて、

ぬうと立つて、笠かさを冠かぶつてる姿すがたといふものは、堤坊どての上に一本占うへし

めぢは治茸ちぢが生はへたのに違ちがひません。

ゆふがた夕方ゆふがたになつて、ひよる長ながい影かげがさして、薄うす暗くらい鼠ねづ色みいろの立た

姿すがたにでもなると、ますく占しめ治茸ちぢで、づくと遠とほいく処ところまで

ひと一ひとならびに、十人も三十人も、小ちひさいののだの、大おほさいののだの、短みぢか

いのだの、長ながいのだの、一いち番ばん橋手前はしてまへのを頭かしらにして、さかり時とき

は毎まい日にち五六十本ぼんも出で来るので、また彼あつち処こつち此こ処ちに五ご六ろく人にんづゝも一ひと

ととかたまりと団だんになつてるのは、千せん本ぼんしめぢつて、くさくさに生はへて居ゐ

る、それは小ちひさいのだ。木きだの、草くさだのだと、風かぜが吹ふくと動うごくん

だけれど、茸きのこだから、あの、茸きのこだからゆつさりとしもしませぬ。これが智恵ちゑがあつて釣つりをする人間にんげんで、些少ちつとも動うごかない。其そのあひ間に魚うをは皆みんないうと泳およいでてあるいて居ゐますわ。

また智恵ちゑがあるつて口くちを利きかれないから鳥とりとくらべツこすりや、五分五分ごぶのがある、それは鳥とりさしで。

過いつかぢう日み見たみことがありました。

他所よそのおぢさんの鳥とりさしが来きて、私わたしん処ところの橋はしの詰つめで、榎えのきの下したで立た留ちどまつて、六本えだめの枝えだのさきに可か愛あいい頬ほ白しろが居ゐたのを、棹さでもつてねらつたから、あら〜ツてさういつたら、叱しツ、黙だまつて、黙だまつてツて恐こはい顔かほをして私わたしを睨ねめたから、あとじさりをして、そツと見みて居ゐると、呼い吸きもしないで、じつとして、石いしのやうに黙だまつ

てしまつて、かう据すゑ身みになつて、中空なかぞらを貫つらぬくやうに、じりツと
 棹さををのぼして、覗ねらつてるのに、頬ほ白しろは何なんにも知しらないで、チ、
 チ、チツチツてツて、おもしろさうに、何なにかいつてしやべつて居ゐ
 ました。

其それをとう／＼突ついてさして取とると、棹さをのさきで、くる／＼と舞まつ
 て、まだ烈はげしく声こゑを出だして啼ないてるのに、智ち恵ゑのあるおぢさんの
 鳥とりさしは、黙だまつて、鱒どぜう拵つかみにして、腰こしの袋ふくろ中なかへ捻ねぢり込こむで、
 それでもまだ黙だまつて、ものもいはないので、のつそりいつちまつ
 たことがあつたんで。

第四

頬ほ白しろは智恵ちゑのある鳥とりさしにとられたけれど、囀さへづつてましたもの。
 ものをいつて居ゐましたもの。おぢさんは黙だんまりで、傍そばに見みて居ゐた私わたし
 までものをいふことが出来できなかつたんだもの、何なにもくらべこして、
 どつちがえらいとも分わかりはしないつて。

何なんでもそんなことをいつたんで、ほんとうに私わたしさう思おもつて居ゐまし
 たから。

でも其それを先せん生せいが怒おこつたんではなかつたらしい。

で、まだくゝいろんなことをいつて、人にんげん間が、鳥とりや獸けだものよりえら
 いものだときさういつておさとしであつたけれど、海うみ中なかだの、山や
 奥まおくだの、私わたしの知しらない、分わからない処ところのことばかり譬たとへに引ひいてい

ふんだから、口答は出来なかつたけれど、ちつともなるほど

と思はれるやうなことはなかつた。

だつて、私母様のおつしやること、虚言だと思ひませんもの。

わたしの母様がうそをいつて聞かせますものか。

先生は同一組の小児達を三十人も四十人も一人でも可愛がらう

とするんだし、母様は私一人可愛いんだから、何うして、先

生のいふことは私を欺すんでも、母様がいつて聞かせの

は、決して違つたことではない、トさう思つてるのに、先生の

は、まるで母様のと違つたこといふんだから心服はされな

いぢやありませんか。

わたしが頷かないので、先生がまた、それでは、皆あなたの思つて

いる通りとほにして置きましやう。けれども木きだの、草くさだのよりも、人間にんげんが立優たちまさつた、立派りつぱなものであるといふことは、いかな、あなたにでも分わかりましやう、先まづそれを基礎とだいにして、お談話はなしをしようからつて、聞ききました。

分わからない。私わたしさうは思おもはなかつた。

「あのウ母おつかさん様、だつて、先せんせい生せい、先せんせい生せいより花はなの方ほうがうつく

しうございますツてさう謂いつたの。僕ぼく、ほんとうにさう思おもつたの、

お庭にはにね、ちやうど菊きくの花はなが咲さいてるのが見みえたから。」

先せんせい生せいは束髮そくはつに結ゆつた、色いろの黒くろい、なりなりの低ひくい頑がんじやう丈なな、で

くくく肥ふとつた婦人をんなの方かたで、私わたしがさういふと顔かほを赤あかうした。それか

ら急きふにツ、ケンドンなものいひおしだから、大おほ方かた其それが腹はらをお立た

ちの源因げんゐんであらうと思ふおも。

「母様おつかさん、それで怒つたの、さうなの。」

母様おつかさんは合点がつてん々々がつてんをなすつて、

「おゝ、そんなことを坊やぼう、お前まへいひましたか。そりや御道理ごもつともだ。」

といつて笑顔えがほをなすつたが、これは私の悪戯わたしいたづらをして、母様おつかさんのおつしやること肯きかない時とき、ちつとも叱しからないで、恐こはい顔かほしないで、莞爾にっこり笑つてお見みせの、其それとかはらなかつた。

さうだ。先生せんせいの怒おこつたのはそれに違ちがひない。

「だつて、虚言うそをいつちやあなりませんつて、さういつでも先せんせ生いはいふ癖くせになあ、ほんとうに僕ぼく、花はなの方がきれいだと思おもふも

の。ね、母様、あのお邸の坊ちんの青だの、紫だの交つた、着物より、花の方がうつくしいつて、さういふのね。だもの、先生なんざ。」

「あれ、だつてもね、そんなこと人の前でいふのではありません。お前と、母様のほかには、こんないふこと知つてるものはないのだから、分らない人にそんなこといふと、怒られますよ。唯、ねえ、さう思つて、居れば、可のだから、いつてはなりませんよ。可かい。そして先生が腹を立てお憎みだつて、さういふけれど、何そんなことがありますものか。其は皆お前がさう思ふからで、あの、雀だつて餌を与つて、拾つてるのを見て、嬉しさうだと思へば嬉しさうだし、頬白がおぢさんにさゝれた時悲しい声

だと思つて見れば、ひい〜いつて鳴いたやうに聞こえたぢやないか。

それでも先生が恐い顔をしておいでなら、そんなものは見て居ないで、今お前がいつた、其うつくしい菊の花を見て居たら可しやう。ね、そして何かい、学校のお庭に咲いてるのかい。」

「あゝ沢山。」

「ぢやあ其菊を見やうと思つて学校へおいで。花にはね、ものをいはないから耳に聞こえないでも、其かはり眼にはうつくしいよ。」

モひとつ不平なのはお天氣の悪いことで、戸外にはなかく雨がやみさうにもない。

第五

また顔を出して窓から川を見た。さつきは雨脚が繁くつて、宛然、薄墨で刷いたやう、堤防だの、石垣だの、蛇籠だの、中洲に草の生へた処だのが、点々、彼方此方に黒ずんで居て、それで湿つぽくつて、暗かつたから見えなかつたが、少し晴れて来たからものゝ濡れたのが皆見える。

遠くの方に堤防の下の石垣の中ほどに、置物のやうになつて、
 畏つて、猿が居る。

この猿は、誰が持主といふのでもない、細引の麻縄で棒

杭ひに結ゆわえつけてあるので、あの、占しめぢ治ち茸たけが、腰こし弁べん当たうの握にぎ飯りめし
 を半はん分ぶん与やつたり、坊ぼつちやんだの、乳ばあ母やだのが袂たもとの菓子くわしを分わけ
 て与やつたり、赤あかい着き物ものを着きて居ゐる、みいちやんの紅べに雀すずめだの、
あをはおりき青あい羽は織おりきを着きて居ゐる吉きち公こうの目め白じろだの、それからあお邸やしきのあなりや
 の姫ひい様さまなんぞが、皆みんなで、からかいに行いつては、花はなを持もたせる、
てぬぐひ手かむ拭かを被かせる、水みづ鉄てつ砲ぽうを浴あびせるといふ、好すきな玩おも弄ちや物やにし
 て、其その代かはり何なんでもたべるものを分わけてやるので、誰たれといつて、
 きまつて、世せ話わをする、飼かひぬし主しはないのだけれど、猿さるの餓うゑるこ
 とはありはしなかつた。
 時とき々／＼悪いたづら戯らをして、其その紅べに雀すずめの天あ窓たまの毛けを撈むしつたり、かな
 りやを引ひ搔つかいたりすることがあるので、あの猿さる松まつが居ゐては、う

つかり可愛らしい小鳥を手放にして戸外へ出しては置けない、
 誰か見張つても居ないと、危険だからつて、ちよいと繩を
 解いて放して遣つたことが幾度もあつた。
 放すが疾いか、猿は方々を駆ずり廻つて勝手放題な道楽
 をする、夜中に月が明い時寺の門を叩いたこともあつたさうだし、
 人の庖厨へ忍び込んで、鍋の大きいのと飯櫃を大屋根へ持つてあ
 がつて、手掴で食べたこともあつたさうだし、ひらくくと青い
 なかから紅い切のこぼれて居る、うつくしい鳥の袂を引張つて、
 遙かに見える山を指して気絶させたこともあつたさうなり、私の
 覚えてからも一度誰かが、繩を切つてやつたことがあつた。其
 時はこの時雨榎の枝の両股になつてゐる処に、仰向に寝転

んで居て、烏の脛を捕へた、それから畚に入れてある、あのしめ
 ぢ草が釣つた、沙魚をぶちまけて、散々悪巫山戯をした揚句が、
 橋の詰の浮世床のおぢさんに掴まつて、顔の毛を真四角に鋏
 まれた、それで堪忍をして追放したんださうなのに、夜が明
 けて見ると、また平時の処に棒杭にちやんと結へてあつた。蛇
 籠の上の、石垣の中ほどで、上の堤防には柳の切株がある
 処。

またはじまつた、此通りに猿をつかまへて此処へ縛つとくのは
 誰だらうくツて、一しきり騒いだのを私は知つて居る。

で、此猿には出処がある。

其は母様が御存じで、私にお話しなすツた。

八九年まへ前のこと、私わたしがまだ母おつかさん様のお腹なかん中に小なかきくなつて居ちつた時じぶん分ぶんなんで、正月、春のはじめのことであつた。

今いまは唯ただ広い世よの中に母おつかさん様と、やがて、私わたしのものといつたら、
 このほんこんこや此かり番ぼし小屋ほかと仮かり橋ほかの他ほかにはないが、其その時じぶん分ぶんは此この橋ほしほどのものは、
 ややしきにはなかひと邸なの庭なの中なかの一ひとツなの眺なが望めに過すぎないのであつたさうで、今いま市いちの人ひと
 が春はる、夏なつ、秋あき、冬ふゆ、遊ゆう山さんに來くる、桜さくら山やまも、桃もも谷たにも、ああの梅ばい
 いりいん林りんも、菖あや蒲めの池いけも皆みな父ちやん様やんので、頬ほ白じろだの、目め白じろだの、山やま雀がら
 だだのが、この窓まどから堤どて防ての岸きしや、柳やなぎの下もとや、蛇じや籠かごの上うへに居あるの
 が見みえる、其その身からだ体たいの色いろばかりが其それである、小こと鳥とりではなない、ほんほんと
 ううの可か愛あいらしい、ううつくしいのがちやうどどこんな工く合あひに朱しゆ塗ぬりの
 欄らん干かんのつついた二にかい階かいの窓まどから見みえたさうで。今けふ日ははまだまだおおいいひひで

ないが、かういふ雨あめの降ふつて淋さみしい時ときなぞは、其その時ころ分ののことをい
つでもいつてお聞きかせだ。

第六

今いまではそんな楽たのしい、うつくしい、花はな園ぞのがないかはり、前まへに橋は
錢せんを受う取けると筈ざるの置おいてある、この小ちいさな窓まどから風ふうがはりな猪いぬだ
の、奇きた躰たいな簞きのこだの、不ふ思し議ぎな猿さるだの、ままだ其その他たに人ひとの顔かほをした鳥とり
だの、獸けものだのが、いいくらでも見みえるから、ちちつとは思おもひ出ひでになる
トいつちやあ、アノ笑わら顔ひがほをおしなので、私わたしもさう思おもつて見みる故せいか、
人ひとがあるありて行ゆく時とき、片かた足あしをあげた処ところは一いっぽんあしとり
脚あしの鳥とりのやうで

おもしろい、人の笑ふのを見ると獣が大きな赤い口をあけたよとおも
思つておもしろい、みいちゃんがものをいふと、おや小鳥が囀る
かトさう思つてをかしいのだ。で、何でもおもしろくツてをかし
くツて吹出さずには居られない。

だけれど今しがたも母様がおいひの通り、こんないゝことを
知つてるのは、母様と私ばかりで何うして、みいちゃんだの、
吉公だの、それから学校の女の先生なんぞに教へたつて分
るものか。

人に踏まれたり、蹴られたり、後足で砂をかけられたり、苛
められて責まれて、熱湯を飲ませられて、砂を浴せられて、鞭う
たれて、朝から晩まで泣通しで、咽喉がかれて、血を吐いて、

消えてしまひさうになつてゐる処を、人に高見で見物されて、お
 もしろがられて、笑はれて、慰にされて、嬉しがられて、眼が血
 走つて、髪が動いて、唇が破れた処で、口惜しい、口惜しい、口
 惜しい、口惜しい、畜生め、獣め、ト始終さう思つて、五年
 も八年も経たなければ、真個に分ることではない、覚えられる
 ことではないんださうで、お亡んなすつた、父様トこの母
 様とが聞いても身震がするやうな、そういふ酷いめに、苦し
 い、痛い、苦しい、辛い、惨刻なめに逢つて、さうしてやう／＼
 お分りになつたのを、すつかり私に教へて下すつたので。私は
 たゞ母ちゃん／＼てツて母様の肩をつかまいたり、膝にのつ
 かつたり、針箱の引出を交ぜかへしたり、物さしをまはして

見たり、縫裁おしごとの衣服きものを天窓あたまから被かぶつて見たり、叱しかられて逃にげ出だしたりして居ゐて、それでちやんと教をしへて頂いたゞいて、其それをば覺おぼえて分わかつてから、何なんでも鳥とりだの、獸けだものだの、草くさだの、木きだの、虫むしだの、簞きのこだのに人ひとが見みえるのだからこんなおもしろい、結構けつかうなことはい。しかし私わたしにかういふいゝことを教をしへて下くだすつた母おつかさん様は、とさう思おもふ時ときは鬱ふさぎました。これはちつともおもしろくなくつてかな悲かなしかつた、勿もつ体たいないとさう思おもつた。

だつて母おつかさん様はがおろそかに聞きいてはなりません。私わたしがそれほどおもひの思おもひをしてやうくお前まへに教をしへらるゝやうになつたんだから、うかつに聞きいて居ゐては罰ばちがあたります。人にんげん間間も鳥てうぢゆう獸獣も草さうもく木木も、混こんちゆうるゐ虫虫類類も皆みな形かたちこそ変かはつて居ゐてもおんなじほどのものだと

いふことを。

トかうおつしやるんだから。私わたしはいつも手てをついて聞ききました。
 で、はじめの内うちは何どうしても人ひとが鳥とりや、獣けだものとは思おもはれないで、優やさしくされれば嬉うれしかった、叱しかられると恐こはかった、泣ないてると可かあい
 哀あ想せうだつた、そしていろんなことを思おもつた。其そのたびにさういつ
 て母おつかさん様さんにきいて見るみト何なに、皆みな鳥をりが囀さへつてるんだの、犬いぬが吠ほえ
 るんだの、あの、猿さるが齒はを剥むくんだの、木きが身みぶるいをするんだ
 のとちつとも違ちがつたことはないツて、さうおつしやるけれど、矢や
 張つばりさうばかりは思おもはれないで、いぢめられて泣ないたり、撫なでら
 れて嬉うれしかつたりしいくしたのを、其その都つど度ど母おつかさん様さんに教をしへられ
 て、今いまじやあモウ何なんとも思おもつて居ゐない。

そしてまだ如彼濡れては寒いだらう、冷たいだらうと、さきのや
 うに雨に濡れてびしょ／＼行くのを見ると気の毒だつたり、釣を
 して居る人がおもしろさうだとさう思つたりなんぞしたのが、此
 のせつ節じやもう唯変な簞だ、妙な猪の王様だと、をかしいばかり
 である、おもしろいばかりである、つまらないばかりである、見
 ツともないばかりである、馬鹿々々しいばかりである、それから
 みいちやんのやうなのは可愛らしいのである、吉公のやうなのは
 うつくしいのである、けれどもそれは紅雀がうつくしいのと、
 目白が可愛らしいのと些少も違ひはせぬので、うつくしい、可愛
 らしい。うつくしい、可愛らしい。

第七

また憎らしいのがある。腹立たしいのも他にあるけれども其も一
 場合に猿が憎らしかつたり、鳥が腹立たしかつたりするのとか
 はりは無いので、煎ずれば皆をかしいばかり、矢張噴飯材料な
 んで、別に取留めたことがありはしなかつた。
 で、つまり情を動かされて、悲む、愁うる、楽しむ、喜ぶなどいふ
 ことは、時に因り場合に於ての母様ばかりなので。余所のも
 のは何うであらうと些少も心には懸けないやうに日ましにさうな
 つて来た。しかしかういふ心になるまでには、私を教へるために
 毎日、毎晩、見る者、聞くものについて、母様がどんな

に苦勞くろうをなすつて、丁寧ていねいに親切しんせつに飽あかないで、熱心ねっしんに懇ねんごろに嚙かむで含ふくめるやうになすつたかも知しれはしない。だもの、何どうして学校がくかうの先生せんせいをはじめ、余所よそのものが少々せうぐらゐ位ゐのことで、分わかるものか、誰だれだつて分わかりやしません。

ところが、母おつかさん様わたくしと私わたしとのほか知しらないことをモ一人ひとりほか他しに知しつてゐる

ものがあるさうで、始終しじう母おつかさん様わたくしがいつてお聞きかせの、其それは彼あすこ処こに置物おきもののやうに畏かしこまつて居ゐる、あの猿さる―あの猿さるの旧もとの飼かひぬし主しであつた―老父ちいさんの猿さる廻まはしだといひます。

さつき私わたしがいつた、猿さるに出しゅつしよ処しよがあるといふのはこのことで。

まだ私わたしが母おつかさん様わたくしのお腹なかに居ゐた時じぶん分ぶんだつて、さういひましたつけ。初はつ卯うの日ひ、母おつかさん様わたくしが腰元こしもとを二人ふたり連れて、市まちの卯辰うたつの方はうの天てんじ

神様へお参んなすつて、晩方歸つて居らつしやつた、ちやう

ど川向ふの、いま猿の居る処で、堤坊の上のあの柳の切株に

腰をかけて猿のひかへ綱を握つたなり、俯向いて、小さくなつて、

肩で呼吸をして居たのが其猿廻のぢいさんであつた。

大方今の紅雀の其姉さんだの、頬白の其兄さんだのであ

つたらうと思はれる、男だの、女だの七八人寄つて、たかつて、

猿にからかつて、きやあくいはせて、わあく笑つて、手を拍

つて、喝采して、おもしろがつて、をかしがつて、散々慰むで、

そら菓子を作るワ、蜜柑を投げろ、餅をたべさすワツて、皆でど

つさり猿に御馳走をして、暗くなるとどや〜いつちまつたんだ。

で、ぢいさんをいたはつてやつたものは、唯の一人もなかつたと

いひます。

あはれだとお思ひなすつて、
 母様がお銭を恵むで、肩掛を着せておやんなすつたら、ちいさん涙を落して拜むで喜こびましたつて、さうして、

あゝ、奥様、私は獣になりたうございます。あいら、皆畜生で、この猿めが夥間でござりまじやう。それで、手前達の同類にものをくはせながら、人間一疋の私には目を懸けぬのでござります。トさういつてあたりを睨むだ、恐らくこのちいさんなら分るであらう、いや、分るまでもない、人が獣であることをいはないでも知つて居やうとさういつて母様がお聞かせなすつた、

うまいこと知てるな、ぢいさん。ぢいさんと母様と私と三人だ。其時ぢいさんが其まんまで控綱を其処ん処の棒杭に縛りツ放しにして猿をうつちやつて行かうとしたので、供の女よちうが口を出して、何うするつもりだつて聞いた。母様もまた傍からまあ捨兎すてごにしては可哀想かあいさうでないかつて、お聞きなすつたら、ぢいさんにやくと笑つたさうで、

はい、いえ、大丈夫でござります。人間にんげんをかうやつといたら、餓うゑも凍こゑもしやうけれど、獣けだものでござりますから今いまに長い目めで御覧ごらんじまし、此奴こいつはもう決してけつひもじい目めに逢あふことはござりませぬから

トさういつてかさね／＼恩を謝して分れて何処へか行つちまひ
 ましたツて。

果して猿は餓ゑないで居る。もう今では余程の年紀であらう。
 すりや、猿のぢいさんだ。道理で、功を経た、ものゝ分つたやう
 な、そして生まじめで、けろりとした、妙な顔をして居るんだ。
 見えるく、雨の中にちよこなんと坐つて居るのが手に取るやう
 に窓から見えるワ。

第八

朝晩見馴れて珍らしくもない猿だけれど、いまこんなこと考え

出だしていろんなこと思おもつて見みると、また殊ことにもものなつかしい、あ
 のおかしな顔かほ早くいつて見みたいなど、さう思おもつて、窓まどに手てをつい
 てのびあがつて、ぶくと肩かたまで出だすと※がしぶきかゝつて、眼めのふちが
 ひやりとして、冷つめたい風かぜが頬ほを撫なでた。
 そのときかりばし爾な時とき仮かり橋はしががたくいつて、川かは面づらの小こ糠ぬか雨あめを掬すくふやうに
 吹ふき乱みだすと、流ながれくろくろなながれななつて颯さつと出でた。トいつしよに向むかふふぎし
 ら橋はしを渡わたつて来くる、洋やう服ふくを着きた男をとこがある。
 橋はし板いたがまた、ガツたりガツたりいつて、次第しだいに近ちかづいて来くる、
 鼠ねづ色いろの洋やう服ふくで、釦ぼたんをはづして、胸むねを開あけて、けぼくしう
 襟えり飾かざりを出だした、でつぷり紳士しんしで、胸むねが小ちひさくつて、下した腹つばら
 の方ほうが図づぬけにはずんでふくれた、脚あしの短みぢか、靴くつの大おほきな、帽ぼう子し

の高い、顔の長い、鼻の赤い、其は寒いからだ。そして大跨に、
 其正しい靴を片足づゝ、やりちがへにあげちやあ歩行いて来る、
 靴の裏の赤いのがぼつかり、ぼつかりと一ツづゝ此方から見える
 けれど、自分じやあ、其爪さきも分りはしまい。何でもあんなに
 腹のふくれた人は臍から下、膝から上は見ることがないのだとさ
 ういひます。あら！ あら！ 短服チッコッキに靴を穿いたものが転が
 つて来るぜと、思つて、じつと見て居ると、橋のまんなかあたり
 へ来て鼻眼鏡をはづした、※がかゝつて曇つたと見える。
 で、衣兜から半拭を出して、拭きにかゝつたが、蝙蝠傘を片
 手に持つて居たから手を空けやうとして咽喉と肩のあひだへ柄を
 挟んで、うつむいて、珠を拭ひかけた。

これは今までに幾度も私見たことのある人で、何でも小児の時は物見高いから、そら、婆さんが転んだ、花が咲いた、といつて五六人ばかりのすることが眼の及ぶ処にあれば、必ず立つて見るが何処に因らずで場所は限らない、すべて五十人以上の人が集會したなかには必ずこの紳士の立交つて居ないといふことはなかつた。

見る時にいつも傍の人を誰か知らつかまへて、尻上りの、すました調子で、何かものをいつて居なかつたことは殆んど無い、それに人から聞いて居たことは曾てないので、いつでも自分で聞かせて居る、が、聞くものがなければ独で、む、ふむ、といったやうな、承知したやうなことを独言のやうでなく、聞かせ

るやうにいつてる人で、ひと母様おつかさんも御存じで、ごぞん彼は博士あれはかせぶりといふのであるとおつしやつた。

けれども鰯ぶりではたしかにない、あの腹はらのふくれた様子やうすといつたら、まるで宛然あんかう、鮫あじに肖にて居あるので、私はわたし蔭かげじやあ鮫あんかう博士はかせとさうい

ひますワ。此この間あひだも学校がくかうへ参観さんくわんにき来たことがある。其そのと

時きも今いま被むつて居ある、高たかい帽子ぼうしを持もつて居あたが、何なんだつてまたあんな度はどづれの帽子ぼうしを着きたがるんだらう。

だつて、眼鏡めがねを拭ふかうとして、蝙蝠傘かうもりがさを頤とがで押おへて、うつむいたと思おもふと、ほらく、帽子ぼうしが傾かたむいて、重量おもみで沈しづみ出だして、見みてらうちにつつぼり、赤あかい鼻はなの上うへへ被かぶさるんだもの。眼鏡めがねをはづした上うへで帽子ぼうしがかぶさつて、眼めが見みえなくなつたんだから驚おどろいた、

顔中帽子、唯口ばかりが、其口を赤くあけて、あはて、顔を
 ぶりあげて、帽子を揺りあげやうとしたから蝙蝠傘がばツたり
 落ちた。落ちると勢よく三ツばかりくるくとまつた間に、鮫
 鱧博士は五ツばかりおまはりをして、手をのばすと、ひよいと
 横なぐれに風を受けて、斜めに飛んで、遙か川下の方へ憎らし
 く落着いた風でゆつたりしてふわりと落ちるト忽ち矢の如くに流
 れ出した。

博士は片手で眼鏡を持つて、片手を帽子にかけたまゝ、烈しく、急
 に、殆んど数へる違がないほど靴のうらで虚空を踏むだ、橋がが
 たくと動いて鳴つた。

「母様、母様、母様」

わたしあし
と私は足ぶみをした。

「あい。」としづかに、おいひなすつたのが背後に聞こえる。
窓から見たまゝ振りむ
急込んで、

「あらく流れるよ。」

「鳥かい、獣かい。」と極めて平気でいらつしやる。

「蝙蝠なの、傘なの、あら、もう見えなくなつたい、ほら、ね、
流れツちまひました。」

「蝙蝠ですと。」

「あゝ、落ツことしたの、可哀想到。」

と思はず嘆息をして呟いた。

母様は笑を含むだお声でもつて、

「廉れんや、それはね、雨あめが晴はれるしらせなんだよ。」
 此このときさる時うご猿うごが動うごいた。

第九

ひとまはり
 一 廻まわりくるりと環わにまはつて前まへ足あしをついて、棒ぼう杭ぐひの上うへへ乗のつて、お天てん氣きを見るみのであらう、仰あをむ向むいて空そらを見みた。晴はれるといままに行ゆくよ。

おつかさん
 母おつかさん様さんは嘘うそをおつしやらない。

はかせ
 博士はかせは頻しきりに指ゆびしをして居ゐたが、口くちが利きけないらしかった、で、一い散さんに駆かけて、来きて黙だまつて小こ屋やの前まへを通とほらうとする。

「おぢさんく。」

と厳きびしく呼よんでやつた。追懸おひかけて、

「橋はし銭せんを置おいて去いらつしやい、おぢさん。」

とさういつた。

「何なんだ！」

一ひと通とほりの聲こゑではない、さつきから口くちが利きけないで、あのふくれ

た腹はらに一いつ杯ぱい固かたくなるほど詰つめ込みこくして置おいた声こゑを、紙鉄かみてつ

砲ぱうぶつやうにはぢきだしたものらしい。

で、赤あかい鼻はなをうつむけて、額ひたひごし越こしに睨にらみつけた。

「何なにか」と今度こんどは応揚おうやうである。

私わたしは返事へんじをしませんかつた。それは驚おどろいたわけではない、恐こはかつ

たわけではない。鮫鰐あんかうにしては少し顔かほがそぐはないから何なににしよう、何なにに肖にて居ゐるだらう、この赤あかい鼻はなの高たかいのに、さきの方がほう少し垂すこれさがつて、上う唇はくちびるにおつかぶさつてる工ぐ合あいといつたら
ない、魚うをより獸けものより寧むしろ鳥とりの嘴はしによく肖にて居ゐる、雀すずめか、山やま雀がらか、
さうでもない。それでもないト考かんえて七しち面めん鳥ちやうに思おもひあつた
時とき、なまぬるい音おん調ちやうで、

「馬鹿ばかめ。」

といひすてにして沈しづんで来くる帽ぼう子しをゆりあげて行ゆかうとする。

「あなた。」とおつかさんが屹きつとした声こゑでおつしやつて、お膝ひざの上うへの糸いと屑くづを細ほそい、白しろい、指ゆびのさきで二ふたツ三みツはじき落おとして、す
つと出でて窓まどの処ところへお立たちなすつた。

「わたし渡をお置きなさらんではいけません。」

「え、え、え。」

といったがぢれつたさうに、

「僕は何じやが、うゝ知らんのか。」

「誰です、あなたは。」と冷で。私こんなのをきくとすつきりす

る、眼のさきに見える気にくわれないものに、水をぶつかけて、天

窓から洗つておやんなさるので、いつでもかうだ、極めていゝ。

鮫鰯は腹をぶくくさして、肩をゆすつたが、衣兜から名刺を

出して、策のなかへまつすぐに恭しく置いて、

「かういふものじや、これじや、僕じや。」

といつて肩書の処を指した、恐ろしくみぢかい指で、黄金の指

輪びわふとの太いのはめて居ゐる。

手てにも取とらないで、口くちのなかに低声こゝろにおよみなすつたのが、市しな内衛えいせい生いくわい会ゐん委員きやうい、教育きやうい談話だんわ会くわい幹事かんじ、生命せいめい保ほ險けん会くわい社しゃ々々員ゐん、いちろくくわい、美術びじゆつ奨励しょうれい会くわい理事りじ、大だい日にっ本ぽん赤せき十字じふじ社しゃ社しゃ員ゐん、一六会いちろく々々長ちやう、美術びじゆつ奨励しょうれい会くわい理事りじ、大だい日にっ本ぽん赤せき十字じふじ社しゃ社しゃ員ゐん、あまのきたらう
天野喜太郎。

「この方かたですか。」

「うゝ。」といつた時ときふつくりした鼻はなのさきがふらくして、手てで、胸むねにかけた赤せき十字じふじの徽きしやう章やうをはぢいたあとで、

「分わかつたかね。」

こんどはやさしい声こゝろでさういつたまゝまた行ゆきさうにする。

「いけません。お払はらひでなきやアあとへお帰かへンなさい。」とおつし

やつた。先生せんせい妙な顔めうかほをしてぼんやり立たつてたが少すこしむきになつて、

「えゝ、こ、細こまかいのがないんじやから。」

「おつりを差さしあ上げましやう。」

おつかさんは帯おびのあひだへ手てをお入いれ遊あそばした。

第十

母おつかさん様はうそをおつしやらない、博士はかせが橋はし銭せんをおいてにげて行ゆくと、しばらくして雨あめが晴はれた。橋はしも蛇じやかご籠みんも皆雨あめにぬれて、黒くろくなつて、あかるい日中ひなかへ出でた。榎えのきの枝えだからは時々ときはらくくと

雫しづくお
 雫しづくが落ちる、中流ちゅうりゅうへ太陽ひがさして、みつめて居ゐるとまばゆいばかり。

「母おつかさん様あそ遊びあそに行ゆかうや。」

此このとき時は缺さみをお取とんなすつて、

「あゝ。」

「ねい、出でかけたつて可いの、晴はれたんだもの。」

「可いけれど、廉れんや、お前まへまたあんまりお猿さるにからかつてはなりま

せんよ。さう、可い塩梅あんばいにうつくしい羽はねの生はへた姉ねえさんが何時いつで

もいるんぢやありません。また落おつこちやうもんなら。」

ちよいと見向みむいて、清すい眼めで御覽ごらんなすつて莞爾にっこりしてお俯向うつむきで、

せつせと縫ぬつて居ゐらつしやる。

さう、さう！ さうであつた。ほら、あの、いま頬つぺたを搔いてむくく濡れた毛からいきりをたて、日向ぼつこをして居る、憎らしいツたらない。

いまじやあもう半年も経つたらう、暑さの取着の晩方頃で、いつものやうに遊びに行つて、人が天窓を撫で、やつたものを、業畜、悪巫山戯をして、キツくと齒を剥いて、引掻きさうな権幕をするから、吃驚して飛退かうとすると、前足でつかまへた、放さないから力を入れて引張り合つた奮みであつた。左の袂がびりりと裂てちぎれて取たはづみをくつて、踏占めた足がちやうど雨上りだつたから、堪りはしない、石の上を這つて、ずるくと川へ落ちた。わつといつた顔へ一波かぶつて、呼吸

をひいて仰向けに沈むだから、面くらつて立たうとするともた倒
 れて眼がくらむで、アツとまたいきをひいて、苦しいので手をも
 がいて身軀を動かすと唯どぶんくと沈むで行く、情ないと思つ
 たら、内に母様の坐つて居らつしやる姿が見えたので、また
 勢ついたけれど、やつぱりどぶむくと沈むから、何うするの
 など落着いて考へたやうに思ふ。それから何のことだらうと考え
 たやうにも思はれる、今に眼が覚めるのであらうと思つたやうで
 もある、何だか茫乎したが俄に水中だと思つて叫ぼうとする
 と水をのんだ。もう駄目だ。

もういかんとあきらめるトタンに胸が痛かつた、それから悠々
 と水を吸つた、するとうつとりして何だか分らなくなつたと思ふ

と澁ぼつと糸いとのやうな真赤まつかな光くわうせん線せんがさして、一ひと巾はぎあかるくなつ
 たなかにこの身軀からだが包つまれたので、ほつといきをつくくと、山やまの端は
 が遠とほく見みえて私わたしのからだは地つちを放はなれて其そのいたゞき頂うへより上ところの処つめたに冷ひやい
 ものに抱かへられて居ゐたやうで、大おほきなうつくしい眼めが、濡ぬれ髪がみを
 かぶつて私わたしの頬ほん処とこへくつゝいたから、唯たゞ縋すがり着ついてじつと眼めを
 眠ねむつた「眠ねむつた」に「ママ」の注記おぼえ覚おぼえがある。夢ゆめではない。
 やつぱり片袖かたそでなかつたもの、そして川かはへ落おつこちて溺おぼれさうだつ
 たのを救すくはれたんだつて、母おつかさん様ひざのお膝ひざに抱だかれて居ゐて、其そのほ
 晩ん間きいたんだもの。だから夢ゆめではない。
 一い軀つたい助たすけて呉くれたのは誰だれですつて、母おつかさん様とに問とふた。私わたしがも
 のを聞きいて、返事へんじに躊躇ちうちよをなすつたのは此このとき時ときばかりで、また、

それは猪いぬしだとか、狼おほかみだとか、狐きつねだとか、頬ほ白しろだとか、山やま雀がらだとか、鮫あんかう鰯さばだとか鯖さばだとか、蛆うぢだとか、毛けむし虫むしだとか、草くさだとか、竹たけだとか、松まつ茸たけだとか、しめぢだとかおいひでなかつたのも此この時ときばかりで、そして顔かほの色いろをおかへなすつたのも此この時ときばかりで、それに小ちひさな声こゑでおつしやつたのも此この時ときばかりだ。

そして母おつかさん様さまはかうおいひであつた。

(廉れんや、それはね、大おほきな五ご色しきの翼はねがあつて天てん上じやうに遊あそんで居ゐるうつくしい姉ねえさんだよ)

第十一

(鳥とりなの、母おつかさん様様)とさういつて其その時とき私わたしが聴きいた。

此これにも母おつかさん様様は少すこし口くち籠ごもつておいで、あつたが、

(鳥とりぢやないよ、翼はねの生はへた美うつくしい姉ねえさんだよ)

何どうしても分わからんかつた。うるさくいつたらしまひにやお前まへには分わからない、とさうおいひであつた、また推おしかへ返かへして聴きいたら、や

つぱり、

(翼はねの生はへたうつくしい姉ねえさんだつてば)

それで仕しかた方がないからきくのはよして、見みやうと思おもつた、其そのうつくしい翼はねのはへたもの見みたくなつて、何ど処こに居ゐますくつて、せつツいても知しらないと、さういつてばかりおいで、あつたが、毎ま日いくにあまりしつこかつたもんだから、とうくに余よぎ儀ぎなさう

なお顔色かほつきで、

(鳥屋とりやの前まへにでもいつて見て来るみが可い)

そんならわけはない。

小屋こやを出でて二町ちやうばかり行ゆくと直坂すぢさかがあつて、坂さかの下口おりくちに一軒いつけん

鳥屋とりやがあるので、樹蔭こかげも何なんにもない、お天気てんきのいゝ時ときあかるいゝ

、小ちひさな店みせで、町家まちやの軒のきならびにあつた。鸚鵡あうむなんざ、くるツと

した露つゆのたりさうな、小ちひさな眼めで、あれで瞳ひとみが動うごきますね。毎まい

日ち々々行いつちやあ立たつて居あたので、しまひにやあ見み知し顔がほで私わたし

の顔かほを見みて頷うなづくやうでしたつけ、でもそれぢやあない。

駒こまはね、丈たけの高たかい、籠かごん中なかを下したから上うへへ飛とんで、すがつて、ひよ

いと逆さかさに腹はらを見みせて熟柿ぢくしの落おつこちるやうにぼたりとおりて餌えをつゝ

いて、私をばかまひつけない、ちつとも気に懸けてくれやうとは
 しないであつた、それでもない。皆違つとる。翼の生へたうつく
 しい姉さんは居ないのツて、一所に立つた人をつかまへちやあ、
 聞いたけれど、笑ふものやら、嘲けるものやら、聞かないふりを
 するものやら、つまらないとけなすものやら、馬鹿だといふもの
 やら、番小屋の媽々に似て此奴も何うかして居らあ、といふもの
 やら、皆獣だ。

（翼の生へたうつくしい姉さんは居ないの）ツて聞いた時、莞
 爾笑つて 両方から左右の手でおうやうに私の天窓を撫で、
 行つた、それは一樣に緋羅紗のづぼんを穿いた二人の騎兵で—
 —聞いた時— 莞爾笑つて、両方から左右の手で、おうやうに

私わたしの天窓あたまをなで、そして手てを引ひあつて黙だまつて坂さかをのぼつて行いつた、長靴ながぐつの音おとがぼつくりして、銀ぎんの劍けんの長ながいのがまつすぐに二ふたツならんで輝かがやいて見みえた。そればかりで、あとは皆馬鹿みなばかにした。五いつか日にばかり学がく校かうから帰かへつちやあ其そのあし足あしで鳥屋とりやの店みせへ行いつてじつと立たつて奥おくの方ほうの暗くらい棚たな中なかで、コト〜と音おとをさして居ゐる其鳥そのりまで見覚みおぼえたけれど、翼はねの生はへた姉ねえさんは居ゐないのでぼんやりして、ぼツとして、ほんとうに少すこし馬鹿ばかになつたやうな氣きがしい、日ひが暮くれると帰かへり帰かへりました。で、とても鳥屋とりやには居ゐないものとあきらめたが、何どうしても見みたくツてならないので、また母おつか様さんにねだつて聞きいた。何処どこに居ゐるの、翼はねの生はへたうつくしい人ひとは何処どこに居ゐるのツて。何なんとおいひでも肯き分わけないものだから母おつか

様が、

(それでは林へでも、裏の田畝へでも行つて見ておいで。何故ツて天上に遊んで居るんだから籠の中に居ないのかも知れないよ) それから私、あの、梅林のある処に参りました。

あの桜山と、桃谷と、菖蒲の池とある処で。

しかし其は唯青葉ばかりで菖蒲の短いのがむらがつて、水の色の黒い時分、此処へも二日、三日続けて行きましたつけ、小鳥は見つからなかつた。鳥が沢山居た。あれが、かあく鳴いて一しきりして静まると其姿の見えなくなるのは、大方其翼で、日の光をかくしてしまふのでしやう、大きな翼だ、まことに大い翼だ、けれどもそれではない。

第十二

ひが暮れかゝると彼方に一ならび、此方に一ならび縦横になつて、梅の樹が飛々に暗くなる。枝々のなかの水田の水がどむよりして淀むで居るのに際立つて真白に見えるのは鷺だつた、二羽ひとと一処にト三羽一処にト居てそして一羽が六尺ばかり空へ斜に足から糸のやうに水を引いて立つてあがつたが音がなかつた、それでもない。蛙が一斉に鳴きはじめる。森が暗くなつて、山が見えなくなつた。

よいづき
宵月の頃だつたのに曇くもつたので、星ほしも見みえないで、陰々いんいんとして一面いちめんにもものゝ色いろが灰はいのやうにうるんであつた、蛙かはづがしきりになく。

仰あをいで高い処たかところに朱しゆの欄らん干かんのついた窓まどがあつて、そこが母おつかさん様
のうちだつたと聞きく、仰あほいで高い処たかところに朱しゆの欄らん干かんのついた窓まどがあ
つてそこから顔かほを出すだす、其その顔かほが自分じぶんの顔かほであつたらうにと
さう思おもひながら破やぶれた垣かきの穴あなに腰こしをかけてぼんやりして居ゐた。
いつでもあの翼はねの生はへたうつくしい人ひとをたづねあぐむ、其その昼ひるのう
ち精神せいしんの疲つかれないうちは可いんだけけれど、度どが過すぎて、そんな
晚おそくなるそと、いつもかう滅め入いつてしまつて、何なんだか、人ひとに離はなれた
やうな世間せけんに遠とほざかつたやうな気きがするので、心こころ細ほそくもあり、

裏うらかな悲かなしくもあり、覺おぼつか束つかないやうでもあり、恐おそろしいやうでも
ある、嫌いやな心こころもち持もちだ、嫌いやな心こころもち持もちだ。
早はやく帰かへらうとしたけれど氣きが重おもくなつて其そのくせ癡しんけい神しんけい經するとは鋭すどくなつ
て、それで居ゐてひとりでにあくびがで出た。あれ！
赤あかい口くちをあいたんだなど、自じぶん分でさうおもつて、吃びつくり驚おどろした。
ぼんやりした梅うめの枝えだが手てをのばして立たつてるやうだ。あたりを眺みまは
すと直まっくらで、遠とほくの方ほうで、ほう、ほうツて、呼よぶのは何なんだらう。
冴さえた通とほる声こゑで野の末すえをおし押おひろげるやうに、啼なく、トントントント
ンとこだま冨ふにあたるやうな響ひびきが遠とほくから来くるやうに聞きこえる鳥とりのこゑ声
は、梟ふくろうであつた。
ひと一ひとツひとでない。

ふた 二ツも三ツも。わたしなにはなにに何を談すのだらう、わたしなにはなにに何を談すのだらう、
とり 鳥がものをいふと慄然として身の毛が慄立つた。

ほんとうに其晩ほど恐かつたことはない。

蛙の音がますます高くなる、これはまた仰山な、何百、

何うして幾千と居て鳴いてるので、幾千の蛙が一ツ一ツ眼が

あつて、口があつて、足があつて、身軀があつて、水中に居て、

そして声を出すのだ。一ツ一ツトわなゝいた。寒くなつた。風が

少し出て樹がゆつさり動いた。

蛙の音がますます高くなる、居ても立つても居られなくツて、そ

つと動き出した、身軀が何うにかなつてるやうで、すつと立ち切

れないで蹲つた、裾が足にくるまつて、帯が少し弛むで、胸があ

いて、うつむいたまゝ天窗がすはつた。ものがぼんやり見える。見えるのは眼だトまたふるえた。

ふるえながら、そつと、大事に、内証で、手首をすくめて、自分の身軀を見やうと思つて、左右へ袖をひらいた時もう思はずキヤツと叫んだ。だつて私が鳥のやうに見えたんですもの。何んなに恐かつたらう。

此時背後から母様がしつかり抱いて下さらなかつたら、私何うしたんだか知れません。其はおそくなつたから見に来て下さつたんで泣くことさへ出来なかつたのが、

「母様！」といつて離れまいと思つて、しつかり、しつかり、しつかり襟ん処へかぢりついて仰向いてお顔を見た時、フツト氣

が着いた。

何うもさうらしい、翼の生へたうつくしい人は何うも母様で
あるらしい。もう鳥屋には、行くまい、わけてもこの恐い処へと、
其後ふつゝり。

しかし何うしても何う見ても母様にうつくしい五色の翼が生
へちやあ居ないから、またさうではなく、他にそんな人が居るの
かも知れない、何うしても判然しないで疑はれる。

雨も晴れたり、ちやうど石原も迂るだらう。母様はあゝお
つしやるけれど、故とあの猿にぶつかつて、また川へ落ちて見や
うか不知。さうすりやまた引上げて下さるだらう。見たいな！
翼の生へたうつくしい姉さん。だけれども、まあ、可、母様

が居ゐらつしやるから、

母おつかさん

様さんが居ゐらつしやつたから。

(完)

(「新著月刊」第一号 明治30年4月)

青空文庫情報

底本：「短篇小説名作選」岡保生・榎本隆司 編、現代企画室

1982（昭和57）年4月15日第1刷発行

1984（昭和59）年3月15日第2刷

※文字づかい・仮名づかいの誤用・不統一、促音「っ」「ッ」の小書きの混在は底本のままとしました。

※「猪子」《いぬし》として「#「して」に「ママ」の注記」「は、底本では、「猪」《いぬし》《子して「#「して」に「ママ」の注記」》となつていますが、初収録単行本「柳筥」では「猪」《いぬし》《子にして》となつているため、上記のように改めました。

入力：土屋隆

校正：門田裕志

2003年4月10日作成

2013年2月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

化鳥

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>